

私は以前、県教育センターで国語科の研修講座を担当していたことがある。そのときに感じていたことがあった。その後、再び県教育センターに戻り、様々な国語科の研修講座を見てみたが、また以前と同じことを感じた。それは、ある傾向が見られるということである。

法定研修の一つである「初任者研修」では、学習指導案が書けないという実態がある。とりあえず書いてはあるのだが、指導案で使われている用語の意味がわかってはいない。当たり前のように教科書会社の指導書を見ながら書いている。

単元と教材の違い、教材観・児童観・指導観にはどんなことを書くのか、評価規準とは何か、本時のねらい・目標はどのように書けばいいのか、学習活動と学習内容の違い、指導上の留意点には何を書けばいいのかなどについての理解が足りない。これは、先生方の資質や能力、努力の問題ではなく、先生方が置かれている環境の問題だと考える。

では、自分の場合はどうだったのか。教員1年目に学習指導案は書けたのかというと書けなかった。ただし、指導はしていただいた。自分に理解力、吸収力がなかっただけのことである。今は、そもそも指導されていないように感じる。その証拠に、こちらが説明すると先生方は初めて聞いたような反応をするのである。

初任者に限らず、いろいろな方の授業の設計図である学習指導案を見てみる。すると、授業で「これをやりたい」という思いが溢れているものに出会うことは少ない。「授業で勝負する」と言っても、これではいけない。自分は、子どもたちをこうしたい、こんな力をつけさせたいという思いがほしいところである。

では、自分の場合はどうなのか。10年以上経って、ようやく「これをやりたい」という思いを出せるようになった。そもそも、それまでは、そういうものだということを知らなかった。何事も先達は必要である。

福島県独自で行っている2年次フォローアップ研修では、1年目からの大きな変容が見られることは少ない。基本的には、1年目の初任者のときと同じ傾向が見られる。たまに、伸びを感じさせる教員に出会うことがある。こういった方は、将来が楽しみである。きっと、何かしらのきっかけがあったのだろう。

これも福島県独自で行っている6年目以上の教員を対象とした経験者研修Ⅰになると、1年目、2年目とほとんど変わらない教員もいれば、伸びてきている教員も出てくる。教師としての5年間の取り組みの違いが、大きな差となって表れる。大きな研究テーマを設定しなくてもいいのだが、「発問・指示」「板書」「ノート指導」「机間指導」「コーディネート」などの自分なりのテーマを決めて、年間や学期ごとに課題意識をもちながら日々の授業に臨むことが大切である。

しかし、残念なことに学習指導案が書けないという状態に変化はない。1・2年目にマスターしなかったことは、5年が経過しても、そのままの状態になるようである。

11年目以上になると法定研修である経験者研修Ⅱになる。この辺になると、伸びていく教員とそうでない教員に分かれるようになる。10年間の取り組みの差はあまりにも大きいと言わざるを得ない。「この先生いいな」「この先生期待できるな」と感じる教員は決して多くはない。ここから伸びていくには、何かしらのきっかけが必要となる。何もしなければ、そのままずっといつまでも可能性がある。さすがに学習指導案のレベルは上がっているが、10年経っても用語の意味を理解して書いている教員の割合はまだまだ低いのが現状である。「職能発達上の変化は経験3年目までに生起する」という言葉は真であると言える。